



静岡の自然と文化

東部・伊豆半島を中心に

小山真人+白井嘉尚

静岡大学地域創造教育センター(編)

静岡大学公開講座ブックレット11

静岡 の 自然と文化

東部・伊豆半島を中心に

静岡の自然と文化

東部・伊豆半島を中心に



世界遺産・富士山と伊豆半島ジオパーク……03

小山 真人 ● 静岡大学未来社会デザイン機構教授／火山学、地震・火山防災

はじめに

- I 富士山の生い立ち
- II 富士山の歴史噴火
(1)貞観噴火 (2)宝永噴火
- III 世界遺産 富士山
- IV 伊豆半島ジオパークについて
(1)ジオパークとは何か (2)伊豆半島ジオパークの価値
(3)伊豆半島ジオパークの活動
- V ジオパークのアーティストたち

地域之力×アート之力～静岡での試み～……27

白井 嘉尚 ● 静岡大学名誉教授／絵画、現代美術

はじめに

- I めぐるりアート静岡
(1)インスタレーション (2)美術史との距離 (3)写真・映像によって
(4)国際交流 (5)ワークショップ (6)パフォーマンスアーツ
- II 美術でめぐる東海道 in 静岡
東部・伊豆
(1)クリフエッジプロジェクト (2)知半アートプロジェクト (3)青木一香
静岡県内の広域的な芸術祭 東部・中部・西部
(1)富士の山ビエンナーレ (2)UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川
(3)かけがわ茶エンナーレ
静岡県中部・西部のエリア集中型アートプロジェクト
(1)天地耕作計画 (2)ささま国際陶芸祭
(3)遠州横須賀街道ちっちゃな文化展

おわりに

本書は、静岡大学地域創造教育センター地域人材育成・プロジェクト部門の主権により、以下の要領により行われた公開講座「静岡の自然と文化～東部・伊豆半島を中心に～」の講演録である。

・日時:2020年11月29日(日)13:00～16:15 ・開催方法:オンライン開催



世界遺産・富士山と
伊豆半島ジオパーク

小山 真人

静岡大学未来社会デザイン機構教授／火山学、地震・火山防災

はじめに

今日は、富士山と伊豆半島という静岡県が誇る二つの自然遺産の中身、伊豆半島ジオパークを支える人々、それから今回はアートもテーマに入っているので、私が関わったジオパーク関連のアートプロジェクトについて話したいと思います。

まず、世界遺産と世界ジオパーク、ユネスコエコパーク (MAB: Man And Biosphere Reserve) の三つはよく比較されるので、最初にその違いを簡単に説明します。

世界遺産で重要なのはとにかく保護であり、活用の概念はありません。静岡県では富士山が文化遺産に登録されています。

ユネスコエコパークには、生態系を保全するだけでなく、活用するという概念があります。日本でのみユネスコエコパークという名前で呼ばれています。国際的には通用しない点に気を付けてください。静岡県では南アールプスが登録されています。

世界遺産もユネスコエコパークも、いったん認められれば保全対象が失われなにかぎり取り消しはありません。

一方、厳しい再審査があるのが世界ジオパーク（正式名称・ユネスコ世界ジオパーク）です。他の二つに比べて歴史の浅いプログラムなので、まだ欧州と中国に偏在していますが、ようやく四四方国一六一地域に広まってきました。日本では二〇〇八年以降、九つのユネスコ世界ジオパークが認定されています。

ジオパークには保護だけでなく、活用の概念がしっかりとあります。しかも自然物だけでなく文化的な資産も含まれます。そして、それを支えている人々がいることを非常に重視しています。四年に一回の厳しい再審査があり、伊豆半島は来年が審査年になっており、関係者は準備に入っています。

これらユネスコの代表的プログラムを三つとも有している県は、日本に他にありません。これは静岡県が誇っていることだと思います。

富士山と伊豆半島は、地学的に極めて特殊な場所に位置しており、日本付近にある四枚のプレートのうち三枚の境界付近に隣接しています。この場所は、フィリピン海プレートの先端部が本州に向かって移動し、まさに衝突が起きつつある所でもあります。日本列島は、地震・火山活動が激しい、活動的なプレート沈み込み帯です。そこに直交する形で伊豆・小笠原弧というもう一つの活



図1 佐野川の景ヶ島渓谷 撮影:小山真人(静岡大学)

動的なプレート沈み込み帯が突っ込んできて衝突している場所は、現在の地球上でここだけです。地球上の特異点とも言えるわけで、その点でも富士山と伊豆半島は価値が高い場所です。

I 富士山の生い立ち

富士山の生い立ちを簡単に説明すると、二〇万年前には富士山そのものがありませんでした。箱根山や愛鷹山などの古い火山はありましたが、それらの火山の間に一〇万年前に誕生したのが富士山です。崩れたり成長したりして、形の変遷を遂げながら現在の姿に近づいてきた生い立ちを持ちます。しかし、富士山を火山として実感するのは、多少の知識がなければ難しいと思います。

産業技術総合研究所が最近刊

行した富士山の地質図を見ると、山頂から放射状に広がる多数の領域があります。その多くはいろいろな時代に流れ下った富士山の溶岩です。この中で特に遠くまで伸びているのが三島溶岩です。噴火した溶岩が箱根と愛鷹山の間を流れ、現在の三島駅付近に達しています。富士川の河原にある溶岩もかなり遠距離を流れてきたものです。中には三〇km以上流れたものもあります。これらの溶岩が流れ出したのは、今から一万七〇〇〇年〜八〇〇〇年前です。

三島溶岩がよく見える場所の一つが鮎壺の滝です。長泉町と沼津市の境界にある滝で、黄瀬川が流れていきます。滝をつくる岩盤が、富士山から二万年前に流れ出した三島溶岩で、厚さは七mぐらいあります。溶岩の端にあたる場所なので、手前にあつた柔らかいローム層が削られて滝になりました。

この滝から少し上流の裾野市内には景ヶ島渓谷けいがしまという見事な峡谷があり、三島溶岩が浸食を受け、その断面に美しい柱状節理が見られます(図1)。遊歩道が整備されているのですが、ジオパークに含まれていないため、ほとんど誰も来ない場所です。もったいないので一度行ってみてください。

三島駅北口を出るとすぐ左側のタクシー乗り場の裏に



図2 大沢崩れの壁面 撮影:小山真人(静岡大学)

岩壁が見えます。これも三島溶岩です。ルーペを持って
いけば中の結晶や、溶岩中の火山ガスが抜けた気泡も観
察できます。

また、三島駅南口前の楽寿園という公園では、池の水
位が下がっているときなら底に三島溶岩の表面構造が見
えますし、園内の遊歩道でも溶岩が流れた時にできた縄

状構造を観察できます。パホイホイ溶岩といって、粘り
気が少ない溶岩が薄く平たく流れて表面にしわが寄るの
です。

富士山の西側斜面のどこかで噴火して、延々と芝川沿
いを流れて富士川に入り、そのまま富士川を流れて河口
近くまで来た溶岩が水神溶岩です。約一万七〇〇〇年前
の溶岩で、富士川の河原で見られます。旧国道1号線の
富士川鉄橋下の河原に見える岩場が水神溶岩です。河原
に下りて、釣り人が通る小道を進むと溶岩の上まで行く
ことができ、表面構造を観察できます。こういったもの
から、火山の麓に住んでいるという実感を持つていただ
くと思います。

その後、富士山はそれほど遠くまで溶岩を流さなくな
り、やや粘り気の増した溶岩が山腹を流れて途中で止ま
る活動を繰り返した時代が五六〇〇年〜三五〇〇年前で
す。その時代の様子は、「大沢崩れ」に行くときよく観察
できます。御中道おちゅうどうのハイキングコースの終点付近から大
沢崩れの崖が目の前に見え、溶岩が累々と積み重なった
跡を観察できます(図2)。つまり、これは富士山の成
長の証です。積み重なっていくということは、山が大き
く高くなっていったことを意味しています。

三五〇〇年〜二三〇〇年前には、山頂で爆発的な噴火



図3 御殿場岩屑なだれの流れ山 撮影:小山真人(静岡大学)

を繰り返す時代が来ました。その時期の最後にあたる約二三〇〇年前に起こった山頂での爆発的噴火の跡を現在の山頂付近で見ることができます。赤黒い岩がかさぶたのように地表にへばり付いているのが分かります。火山弾がくつき合った地層で、赤い色をしているのは熱いまま空気と触れて赤く焼けたからです。

この頃の富士山で大事件が起きました。現在の富士山頂の1kmほど東側に突き出ている峰が崩れてしまったのです。かなり大規模な崩落で、峰全体がえぐられるように東側に崩れました。こうした現象を山体崩壊といいますが、これが起きたのが二九〇〇年前で、その証拠を御殿場付近で見つけることができます。山体崩壊で崩れた堆積物のことを岩屑がんせつなだれといえます。

岩屑なだれの分布域には、崩れる前の山体をつくっていた大きな部品が小山のように突き出た「流れ山」がたくさん分布しています。市街地では造成工事で失われたのですが、田園地帯ではまだ幾つも見るることができます。空から見ると屋敷森のようにも見えますが、植生がない場所でも出っ張った地形になっているのがわかります(図3)。

東側では、少なくとも三回、富士山が山体崩壊を起こした証拠が見つかっています。工事現場の崖などで三枚

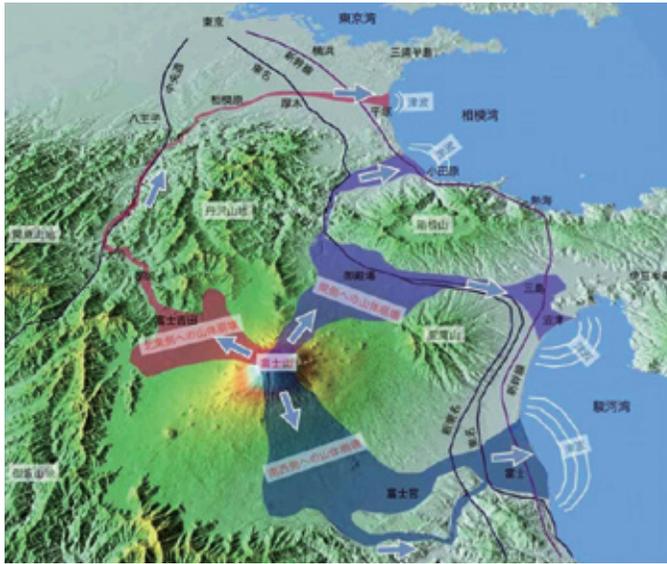


図4 富士山で生じた3方向への山体崩壊(推定事例も含む)

噴火年	噴火名	噴出量	主な噴火様式	記録文字数	火口や堆積物
781		中	降下火砕物	27	△狸子山
800-802	延暦	中	降下火砕物と溶岩流	174	△鷹丸尾溶岩
864-866	貞観	大	溶岩流	649	○青木ヶ原溶岩
937		中	溶岩流	35	△剣丸尾第1溶岩
999		小～中	?	44	×
1033		中	溶岩流	33	△日沢溶岩・剣丸尾第2溶岩
1083		小～中	降下火砕物?	17	×
1435		小	溶岩流	16	△大流溶岩
1511		小	?	53	×
1707	宝永	大	降下火砕物	約30000 (1943年時点)	○宝永火口

図5 富士山の歴史噴火(信頼性の高いもののみ)

の岩屑なだれ堆積物が見つかっており、一番上が二九〇〇年前、真ん中が二万年前、一番下はおそらく三万〜四万年前のものです。

さらに調べてみると、富士山が崩れた方向は東だけではありませんでした。南西側では、田貫湖付近の台地をつくった山体崩壊が起きました。北東側では崩れた土石そのものは確認できていませんが、下流に厚い泥流の堆積物があり、上流での山体崩壊が疑われます。

つまり、富士山は崩れたり成長したりする地形変化を何度も繰り返してきたことが分かります(図4)。現代を生きる私たちは、二九〇〇年前の崩壊後に新たに成長してきた富士山の形をたまたま見ているわけです。

そして、先に述べた二三〇〇年前の山頂の大噴火が終わった後は、なぜか山頂火口が噴火しなくなりました。小さな水蒸気爆発をしたような跡はありますが、本格的な噴火の証拠は見つからないのです。そのかわり目立つのが山腹で起きた割れ目噴火の跡です。

II 富士山の歴史噴火

歴史時代に入ると、信頼すべきものとしては計一〇回ほどの噴火の記録があります(図5)。中にはいまだにどこで噴火したのかよく分からないものもあります。一方、多くの文字数が残っているのは噴火規模が大きかったからで、中でも大規模だったのは平安時代の貞観の噴火と江戸時代の宝永の噴火です。



青木ヶ原溶岩

図6 本栖湖の青木ヶ原溶岩 撮影：小山真人(静岡大学)

(1) 貞観噴火

貞観の噴火は、北西側山腹の天神山スキー場の裏山辺りで発生しました。地質と古記録から噴火の様子を再現してみると、まず二列の割れ目火口が開いて、そこから青木ヶ原溶岩をこんこんと流しました。噴火としては穏やかなのですが、溶岩の流出が数カ月は続いたと見られます。当時せの湖^{うみ}という大きな湖がありました。そこに溶岩がどんどん流れ込み、湖を分断してしまいました。そして現在の西湖と精進湖ができたのです。本栖湖は今よりも少し広い湖でしたが、溶岩で一部埋まってしまいました。

本栖湖は澄んだ湖で、上空から見ると水中の様子までよく分かります。溶岩の先端は水中で枝分かれしているのですが、その様子も見えます(図6)。表面は固まっても内部はまだ圧力が高いので、固まった表面を割って割れ目が入る場合があります。溶岩の伸びる方向に沿って割れ目を作るのです。その様子もよく見えています。

青木ヶ原溶岩は、青木ヶ原樹海をつくった溶岩でもあります。溶岩の表面は非常にでこぼこしていて、そこに森が生い茂りました。昔は炭焼きで森を使っていたので

すが、今は利用する価値があまりなくなって放置されており、すっかり樹林に戻ってしまいました。

また、この溶岩が北西側に流れたのは非常にラッキーだったと思います。もう少し南で噴火していたらおそらく駿河湾まで達していたぐらいの大量の溶岩でした。北東に流れ出てもおそらく富士吉田を通り越して都留や大月まで流れていったはずです。たまたま北西側で噴火したために、深い湖を一つ埋めて終わりました。

(2) 宝永噴火

一七〇七年に発生した宝永噴火については、かなり多数の記録が残っています。いくつかの絵図も残っていて、有名な沼津の土屋家の絵図は、昼の情景、夜の情景、焼け納まりの情景の三点セットです。実際に噴火を見た人が描いたことに間違いなく、噴火後に宝永山ができていたとの付記もあります。

西暦で一二月に起きた噴火なので、強い季節風にあおられて南関東一円に火山灰が降り注ぎました。江戸での厚さは二〜三cmです。一方、麓では2mを超える場所もあります。新東名の工事現場で見つかった降灰の跡をよ



図7 宝永噴火で降りつもった降下軽石・スコリア 撮影：小山真人(静岡大学)

く見ると、うねうねした形状の白い層があることが分かります(図7)。宝永噴火の開始直後に降った軽石です。マグマの化学組成が変わり、後に黒いスコリアに変化しています。

下の茶色い層はローム層で、それを覆う上面がうねう

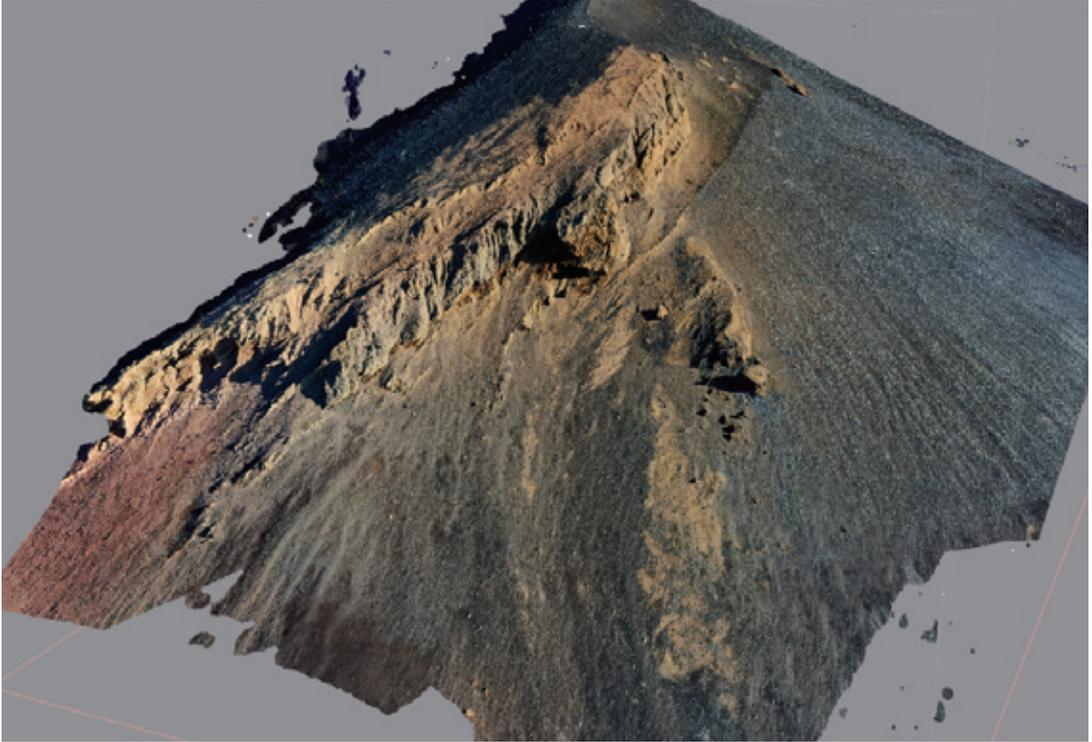


図8 ドローン近接撮影写真のSfM処理による3Dモデル

ねした暗褐色の層は畑の耕作土です。当時ここで畑作をしていた人が作った畑の畝がそのまま軽石で埋まったこととなります。こうした当時の人々の苦勞がしのばれる証拠も残っているのです。

また、宝永噴火は、南東山腹に開いた三つの火口で発生し、その脇に宝永山ができました。宝永山の「赤岩」は、周囲と違って茶色でいかにも古そうに見えるので、一万七〇〇年前より古い時代の富士山の一部分が、宝永噴火中の隆起で顔を出したものだといわれて長い間考えられてきました。

しかし、きちんと調査すると、どうも違うということが分かってきました。ドローンを使って宝永山をあちこちから撮影して写真測量し、3Dモデルを作りました（図8）。つまり、これまで地上にへばりついて見ていたものを、空に浮いた状態で精密に観察できるようになったのです。その結果、「赤岩」も宝永噴火によって降り積もった地層であり、おそらく噴火時の熱や、熱水が噴き出したことにより、本来は黒かったスコリアを変質させてしまったことがわかりました。つまり宝永山は、宝永噴火の噴出物が降り積もってきた山で、その一部（赤岩）が噴火中に変質したということになります。



図9 白糸の滝と音止の滝(静岡県富士宮市) 撮影:小山真人(静岡大学)

Ⅲ 世界遺産 富士山

世界遺産の「富士山」には全部で二五の構成資産があり、すべて文化遺産なのですが、実はその半分以上

は自然がつくったものを人間が信仰の対象として利用してきたために文化遺産となったのです。

例えば山宮浅間神社も自然物の性格がつよく、一五〇〇年ぐらい前に青沢溶岩が山腹から流れ下ってきた先端にあるのですが、門をくぐって入っても本殿がなく、階段だけがあって、その上で行き止まりになっています。上に登るとちよつとした広場が

あって、その先に富士山が見えています。つまり、富士山を神様として遙拝するための神社なのです。なぜこんな地形ができたかというところ、溶岩流がつくったからです。溶岩流は粘っこい液体なので、上が平らになり、末端が切り立った崖(末端崖まつたんがし)になります。そして、両側面に溶岩堤防という土手をつくります。

末端崖の上に造られた遙拝所に登れば景色は当然よいのですが、景色がよい場所は他にもあるので、わざわざここに造ったということは何らかの信仰上の理由があったのだと思います。浅間神社は噴火を鎮めるための神社です。おそらく、溶岩が流れてきた五世紀ごろのことを知っている人が九世紀に建てたのです。どこかに記録があるわけではないのですが、おそらくそうではないかと考えています。

それから、白糸の滝も面白いので紹介しておきます。滝の様子をよく見ると、上に載っているのが溶岩で割れ目がたくさん入っていて水を通します。下側は土石流で、水を通しにくい地層です。ということは、ちょうど不透水層と透水層の境界で水が湧いていることとなります。上から見ると、延々と横に広がった規模の大きな滝だということが分かります(図9)。つまり、かなり広い幅で伝わってきた地下水がここで湧



図10 大沢扇状地 撮影：小山真人(静岡大学)

いていることがわかります。ちなみに、隣に見えるのは音止の滝で、こちらは表流水の滝です。ここは芝川がなぜか二手に分かれていて、また下流で合流するという不思議な場所です。白糸の滝の上流にある芝川には水がほとんど流れておらず、この滝に流れ落ちているのはほとんどすべてが伏流水（地下水）という非常に興味深い滝です。

大沢崩れから大量の土砂が崩れてきて、大沢扇状地を形成したのですが、その先端付近に位置する白糸の滝は、当然扇状地の土砂で埋まっていてもおかしくない場所にあります。大沢扇状地には常に大量の土砂が流れてくるので、そこに大規模な砂防施設を造り、土砂を食い止めています（図10）。しかし、現在こそ遊砂地と砂防ダムがたくさんできていますが、五〇年前には何もなく、扇状地は荒れていました。この土砂がなぜ白糸の滝を埋めなかったのか、実に不思議です。ここを守ってきたプロセスが何かあるわけです。

そのことを考えて行き着いたのが活断層です。この周辺には富士川河口断層帯という活断層帯が通っていて、その中の芝川断層がちょうど白糸の滝と富士山の間を通過しています。芝川断層は動くたびに西側が隆起します。大沢扇状地の土砂がここに入り込もうとし

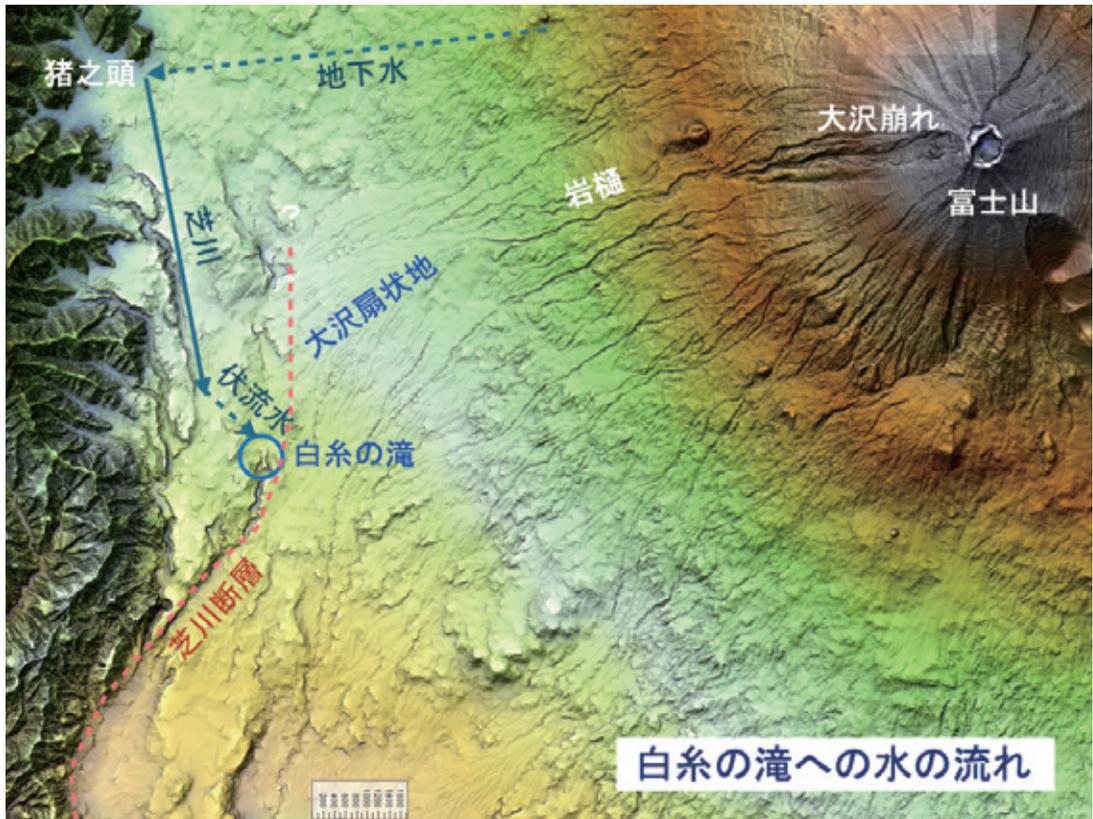


図11 白糸の滝への水の流れ 背景図:カシミール3Dスーパー地形セット

ても芝川断層が時々動いて西側を隆起させるため、白糸の滝側に入り込めず、山や丘ができていくので、川が峡谷となって流れ、その峡谷の上流側の端に白糸の滝があります。

そうだとすれば、不透水層である土石流の層が活断層によって隆起して壁を造るため、地下水の流れはおそらく阻害されているはずです。白糸の滝は、先ほど説明したように芝川の伏流水が湧いている滝と考えるのが自然です。その伏流水は、当然ながら芝川の源流である猪之頭湧水群が水源です。つまり、富士山の地下水が猪之頭湧水群で湧いて芝川となり、その伏流水が湧く滝が白糸の滝というのが正しい理解だと考えます(図11)。

こうした理解の上に立って白糸の滝の保護を考えれば、守るべき場所は伏流水が流れる白糸の滝の上流側です。ここにしっかりと保全の網を掛けて、伏流水を阻害しないように開発抑制をして保全していくべきなのです。残念ながら文化遺産なので、そういう発想がもともと乏しいことがちよつと心配です。

IV 伊豆半島ジオパークについて

(1) ジオパークとは何か

次に、伊豆半島ジオパークの話をしたと思います。

ジオパークは地質公園でもないし、世界地質遺産でもありません。大地が生んだ資産がもちろん一番の土台にあ

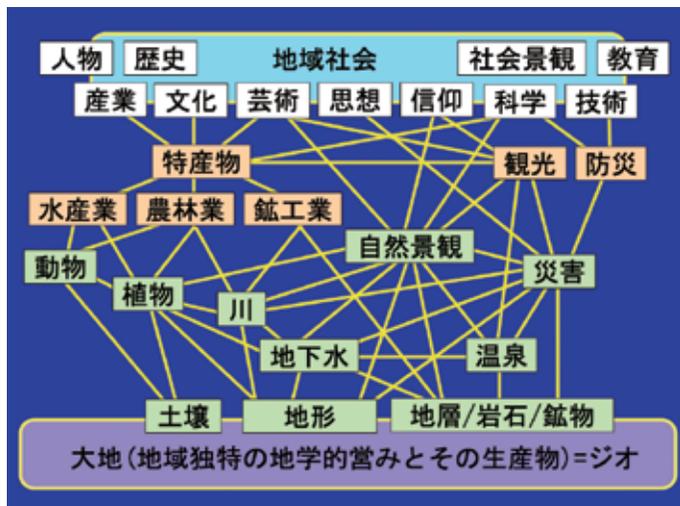


図12 地面の上にあるものがすべてジオパークの構成資産

るのですが、それ

らを保全・活用し

て地域を盛り上げ

ていくための仕組

みがジオパークで

す。それをきちん

と実行している地

域を、ユネスコが

モデル地域として

認定する。それが

ユネスコ世界ジオ

パークです。

活用の仕方には

経済への利用と文

化・教育への利用の二つがあり、それらの中には保全・防災対策も含まれます。大地が生んだ資産を教育・文化、経済・観光、保全・防災の三本柱で生かし、地域を起こしていく仕組みであると捉えることも可能です。

一番の土台に大地の資産、すなわち貴重な地層や岩石などがあり、その上に海や川や地下水があり、温泉も湧き、動植物が暮らし、自然災害も起きて、さまざまな自然景観が形作られています。それらを人間がうまく利用して、さまざまな産業をおこし、特産物を作り、観光や防災活動や、今日のもう一つのテーマである文化・芸術活動も営み、そうしたすべての結果として地域社会の様々な要素が成り立っています(図12)。このベースにある大地だけではなく、そこからつながるすべてのものを資産として捉え、それらを守りつつ活用していく場所がジオパークです。

ユネスコ世界ジオパークは、現時点で世界四四方国一六一地域にあり、日本では九地域が認定されています。そのほか三四地域が日本ジオパークとして認定されており、認定を目指す地域も一四あります。このように、日本中にジオパーク活動が広まってきています。伊豆半島ジオパークは、地元の一五市町が共同で推進協議会を組織し、運営しています。

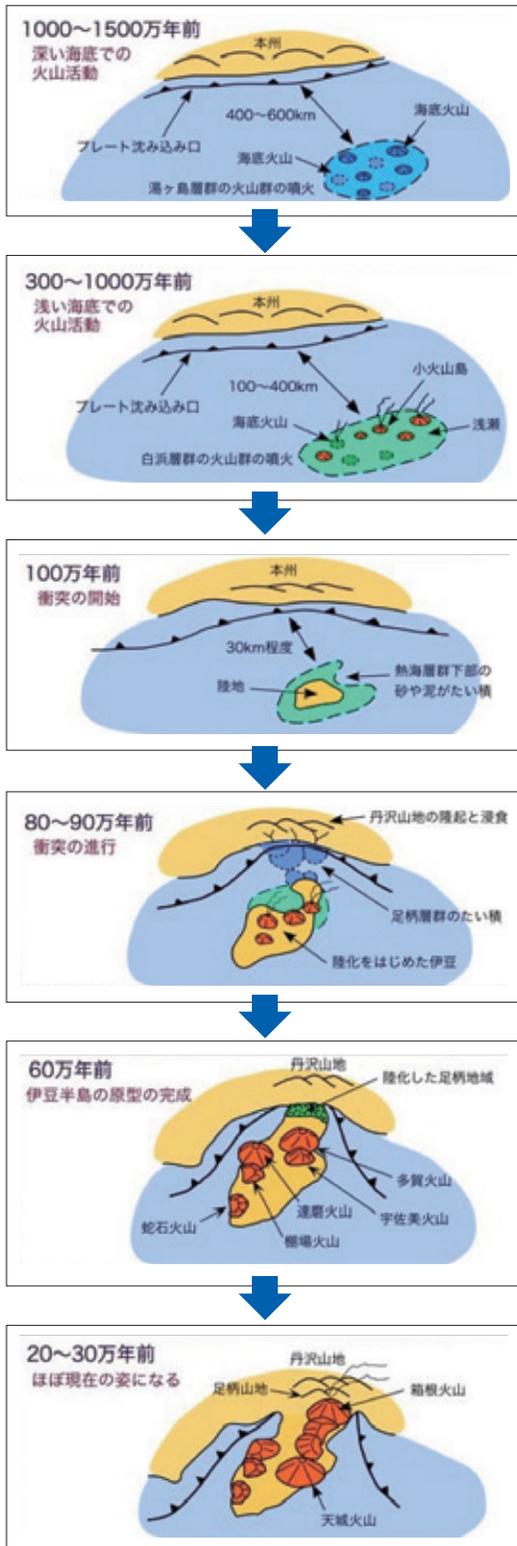


図13 伊豆のおいたち
長い海底火山時代→本州への衝突と半島化→陸上火山時代

ジオパークの認定には厳しい審査があり、そのための審査基準があります。ジオパークの見どころサイトを保全するだけでなく、歴史・文化的資産まできちんと見せているか、見学のためのインフラを整備しているか、住民がきちんと参加できているか、教育への利用ができていくか、ジオパーク全体が管理されていて計画的であるかどうか、他のジオパークと協力関係をいかに結んでいるかといったことが、かなり厳しく審査されます。伊豆半島ジオパークは二〇二一年に推進協議会を設立した後、さまざまな活動実績を積み、二〇一八年にようやくユネスコ世界ジオパークとして認定されました。

(2) 伊豆半島ジオパークの価値

伊豆半島は元々、現在の位置にはなく、フィリピン海プレートの運動によって南から移動し、本州と衝突・合体したことが地質学的に立証されています。本州から遠く離れていた海底火山の集まりが徐々に近づき、本州との間に海峡ができ、その海峡が閉じて現在の半島の姿になったという壮大なストーリーの下に誕生したのが伊豆半島です(図13)。

中でも海底火山の時代が長く、その後は隆起して陸

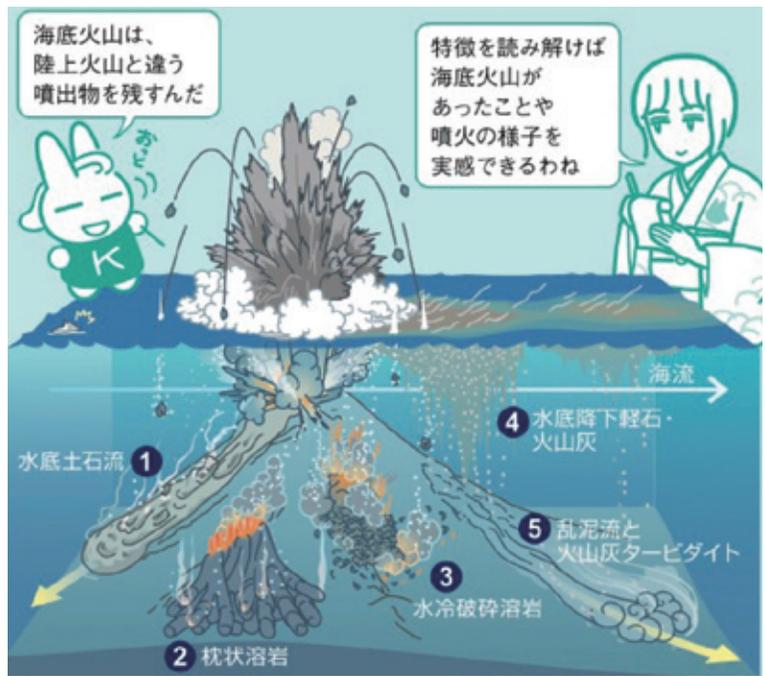


図14 海底火山の読み解き方



図15 海底に降り積もった軽石と火山灰(西伊豆町堂ヶ島) 撮影:小山真人(静岡大学)

を流れるときは表面張力で丸まってチューブ状の流れになります。その断面を見ると枕が積み重なっているように見えるので、枕状溶岩といえます。それが伊豆半島のあちこちで見られます。火山灰や軽石が海底に降り積もる時には、波や海流の作用で移動しながら美しい縞模様を作っており、西伊豆の堂ヶ島などで観光地になっています(図15)。

地となったため、本来は潜水艇で潜らないと行けない海底火山の様子を地上で確認できるのが伊豆半島の特徴であり、少し知識があれば海底火山を読み解ける楽しい場所です(図14)。

例えば、先に述べた富士山の三島溶岩のように、陸上では平たく薄く流れる粘り気の少ない溶岩が、海底

海底火山は文化的な景観にも利用されています。例えば下田市のペリーロードの景観をつくる重要な要素である凝灰岩の伊豆石は、美しい縞模様をもつ海底火山の火山灰や軽石を切り出したものです。これらの伊豆石は貴重な石材として半島内外の各地に運ばれ、江戸お台場の石垣や、世界遺産にもなった葦山反射炉に



図16 大室山スコリア丘 撮影:小山真人(静岡大学)

も使われています。

伊豆半島では陸上になってからも噴火が続
き、多種多様な火山地形をつくりました。中
でも伊豆東部火山群は一五万年前から噴火し
続けている活火山で、例えば四〇〇〇年前に
形成された大室山は地元の茅取り場として
山焼きをして森林が育つのを防いできたため、
美しい山体が保全されています(図16)。そ
のほか、一〇万年前にできた一碧湖という火
口湖、二七〇〇年前にできた矢筈山・孔ノ山
などの溶岩ドームもあります。まるで火山の
野外博物館のようです。

大室山のふもとからは大量の溶岩が流出
し、周囲の土地をならしたり海を埋め立てた
りして伊豆高原と城ヶ崎海岸ができました。
溶岩が谷の出口をふさいだことで、小さな湖
もできました。この湖は明治初年まで一部存
在していたのですが、水抜きトンネルを掘る
など排水路を造って干拓し、今は水田に生ま
れ変わっています。

先に述べた伊豆半島の生い立ちを反映し
て、割れ目の少ない不透水層(海底火山の地



図17 火山独特の湧水が育むワサビ沢や柵田

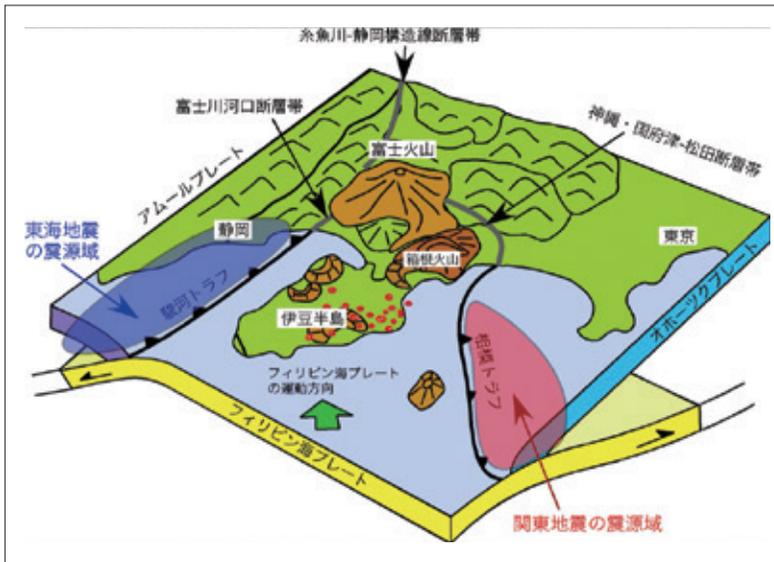


図18 伊豆半島周辺のプレート構造

層)の上に、隙間が多い陸上火山の地層が重なる二重構造をしているので、その境目に地下水がたまりやす(図17)。たまつた水は谷間に湧き出るため、それを利
用して伊豆半島を代表する特産品のワサビが作られて
います。松崎町の石部の柵田も、こうした湧水を稲作
に利用しています。

温泉も豊富にあります。地下水が地熱で温まったもの
が湧いているのですが、一〇〇度近い温度に達する場所
もあります。その温泉水が地下の岩石を変質させ、金な
どを含む有用な鉱床ができたりします。かつての伊豆半
島には金鉱山やガラス鉱山があちこちにありました。ま
た、変質した岩石が夕日に照らされて美しく輝く黄金崎
こがね
という名勝もできたわけです。

このように伊豆ではいろいろ
な特産物ができました。おいし
い水も湧きますし、ワサビも栽
培され、プレートの沈み込み境
界の駿河トラフではタカアシガ
ニが捕れます。こういった特産
物はすべて伊豆半島の大地が
作ったものと言えます。

しかし、伊豆半島とその周辺
では、様々な自然災害も起きま
す。半島の両側にプレート境界
があるので、そこでは巨大な地
震が起き、津波が発生します
(図18)。伊豆半島は過去たびた
び津波に襲われてきた場所であ

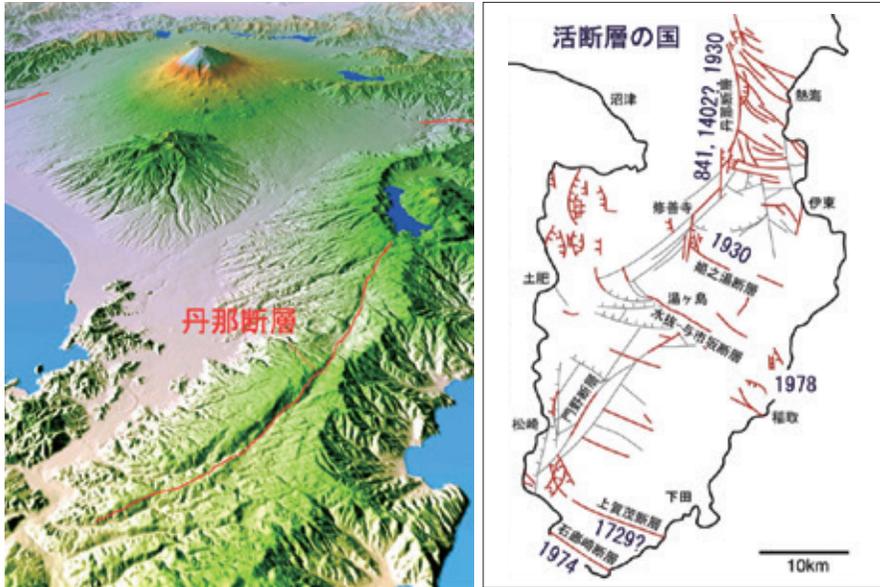


図19 伊豆半島周辺の活断層(背景図:カシミール3D) 右図の数字はその活断層が動いて地震を起こした西暦年を表す

り、あちこちに津波の痕跡が残っています。一八五四年の安政東海地震による津波で、幕府との開国交渉のために下田港に停泊していたロシア軍艦のディアナ号が被災した事件もありました。船が大破したため、戸

田港で修理しようとして曳航していた途中、強風のた
めに富士市沖で沈みました。その後、左右の錨が発見
され、一つは富士市の海岸近くの公園に、もう一つは
戸田造船郷土資料博物館の玄関に飾ってあります。つ
まり、伊豆半島は国際史と直接関わった場所でもある
わけです。

沼津港の入口には「びゅうお」という津波対策用の
大型水門が築かれ、港の奥を守っているのですが、近
くの牛臥山にある大朝神社には、日蓮が津波よけの祈
禱をしたという伝説も残っています。また、先に述べ
た安政の津波によって大朝神社近くの下香貫にできた
「津波池」の絵図も残っています。つまり、伊豆半島
は津波と切っても切り離せない場所なのです。こうし
た伝説やさまざまな歴史資料、現代の防災施設に至る
まで、すべてがジオパークの資産です。

本州との衝突の歴史を反映して、伊豆半島には多数
の活断層が分布しています(図19)。一番有名なのは
丹那断層ですが、有史以来三回動いた活動度の高い活
断層です。函南と熱海の間の山を南北に引き裂いてい
て、谷地形がはつきりとできています。丹那断層を横
切る形で東海道線の丹那トンネルが掘られたのです
が、掘っている途中に北伊豆地震(一九三〇年)が起

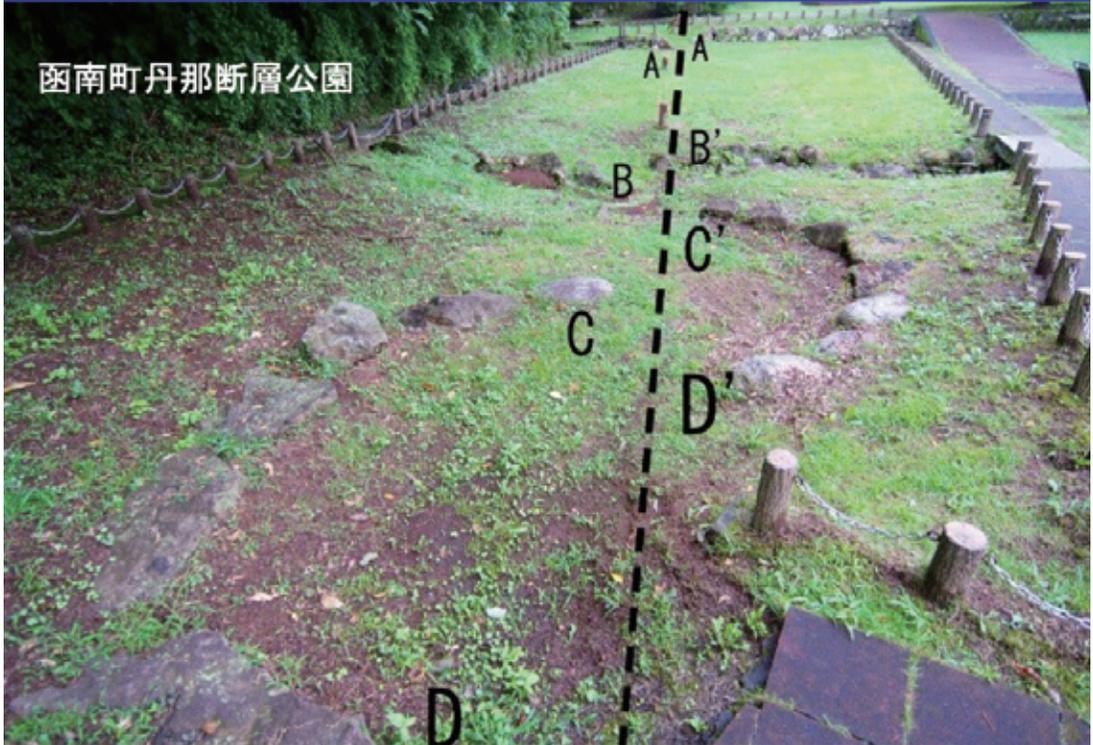


図20 1930年北伊豆地震による丹那断層のずれ

き、トンネルの先端がずれてしまいました。その直後に当時の東京帝国大学の久野久先生が研究に入り、世界で初めて横方向に1kmもずれる断層があることを発見しました。つまり、世界の活断層研究にとってはメッカとも言える土地です。北伊豆地震のことも含めた丹那トンネルの難工事の様子は、後に作家の吉村昭さんが『闇を裂く道』という小説に書いています。

また、丹那トンネルを掘ったことで地下水が大量に抜けてしまったため、稲作とワサビ栽培で生計を立てていた丹那盆地の人たちがその手段を失ってしまいました。その責任を認めた当時の鉄道省の見舞金によって、地元の方々は酪農に転換し、現在の丹那牛乳が生まれたのです。そうしたことをきちんと伝えていこうとして、当時の人たちは北伊豆地震の際に丹那断層がずらした石垣や水路、石積みなどを保存し、国の天然記念物の指定を受けました。後にそれらが公園として整備され、今や伊豆半島ジオパークの第一級の資産となりました(図20)。

他にも伊豆の国市では「かわかんじょう」という祭りがあり、狩野川の水害で亡くなった人々を弔うための行事として続けられてきました。こうした無形遺産も大事なジオパークの資産です。



図21 伊豆半島ジオパーク中央拠点施設GEORIA(修善寺)

(3) 伊豆半島ジオパークの活動

このように、伊豆半島には大地の歴史からつながる様々な物語があり、それらに向き合ってきた人々の物語もあります。ここではとても語り尽くせない素晴らしいものがたくさん残っています。そうしたものを世界中に自慢していこうと設けられたのが伊豆半島ジオパークなのです。

そのための組織整備を二〇一一年から二〇一二年にかけて行いました。ジオパーク活動をするには、運営組織をつくらなければなりません。それが推進協議会です。そこに住民などいろいろな人たちが参画し、ボトムアップ的な活動を行っています。当然、拠点を整備しないとイケないので、GEORIA^{ジオリア}という拠点施設を修善寺に作りました(図21)。ミュージアム機能も備え、ジオパークの事務局も中にあります。また、伊豆半島は広いので各地にビジターセンターも作り、それぞれが小さいながらも個性的な拠点となっています。

また、そもそもジオパークは野外に見どころがたくさんあります。そうしたサイトは半島内に一〇〇カ所以上ありますが、特に観光地にあるものやアプローチの良い



図22 ジオサイト解説看板の整備

ものを優先して整備しています。例えば下田港では、ペリーの銅像の横にジオパークの説明看板を立てて、目の前の景色がどのようにしてできたかということを説明しています(図22)。こうした看板が伊豆半島中にすでに一五〇近くあります。ジオサイトの中には、地域住民が非常に大事にしてくれている場所もあります。西伊豆町の枕状溶岩の崖は、地域の大人や子どもたちがいつも清掃活動をしてきています。

それから、お客さんが来たときに案内できないと具合が悪いので、ジオガイドを計画的に養成してきました。今では認定されたジオガイドが一五〇名ほどいらっしゃいます。中には元々観光ガイドだった人もいますし、ボートや自転車などの得意技がある人もいますので、それぞれの得意技を使ったジオパークならではのツアーを多数企画しています。毎月五〜六回は開催されており、ジオパークのホームページに情報が記載されているので、ぜひご覧ください。ガイドの中には地域の防災リーダーの活動をしている方々もいて、たとえば西伊豆町では住民とともに津波避難ワークショップなどを開催したりしています。

地域の子どもたちも学校教育の中でジオパーク学習に真剣に取り組んでくれています。ユネスコスクールの伊

豆総合高校では、総合学科の必修の授業としてジオパークを学んでおり、その一環で地元の小学校の子どもたちに出前授業をしてジオパークのことを教えたりしています。こうした活動が今でも連綿と続けられています。このように後進の世代を育てていることもジオパークの特徴です。ジオパークは継続審査がたびたびあるので、審査員の前で自分たちの活動を紹介する機会がたくさんあります。外国人の審査員が来れば、彼らは英語を勉強して、英語でしっかりと自分たちの活動を紹介します。ですから、英語教育にも役立っています

V ジオパークの アーティストたち

伊豆半島ジオパークではいろいろなアートも作られました。真っ先に挙げたいのがお菓子作りです。地層や岩石を模した「ジオ菓子」というお菓子が、「ジオガシ旅行団」によって作られています(図23)。伊豆半島各地のいろいろな自然物が取り入れられ、現在二〇種近くあります。例えば斜交層理をパイにしたり、伊

豆石をクッキーにしたり、本物そっくりの素晴らしいお菓子を作っています。今や世界中に知れ渡っていて、ジオパークの国際大会に行けば飛びように持っていかれます。



図23 ジオガシ 伊豆半島各地の特徴的な地層や風景を模したお菓子(南伊豆町のジオガイド鈴木美智子さんが製作)



7市8町のジオサイトの自然の恵みとその災害、
防災も華道で表現します。
認定ジオガイドが作品の前でジオの解説を行います。

図24 伊豆半島ジオパークをいけばなで表現

こうしたものはジオフードと呼ばれ、他国のジオパークでもそうした創作活動が起きています。それがある意味、日本がリードしてきたわけです。ジオガシ旅行団は、日本の他のジオパークに行つてジオガシキッチン講座を開いています。地元の松崎高校の生徒たちもジオ菓子を考案する活動をしました。

伊豆半島のジオフードは他にもあります。例えば、南伊豆町の食堂が作ったジオ定食やジオラーメンなど、個人レベルのものが半島内でたくさん生まれています。企業活動として作っているところも現れました。マックスバリュ函南店では、主にパートの女性たちが中心となつてジオパーク関連食品を企画、販売しています。

鈴木由美子さんという三島市の華道のお師匠さんが認定ジオガイドになりました。彼女は、お弟子さんたちと一緒に城ヶ崎海岸などジオパークの見どころをモチーフとした生け花を作り、展示会を開いています(図24)。日本の伝統芸術がジオパークと結び付いた、世界に誇る例だと思えます。

同じく三島市の住康平さんという現代アーティストの方が、「クリフエッジプロジェクト」という活動を数年前から始めました。その第一回は「半島の傷跡」と題して、丹那断層が動いた向きを表現する巨大な赤と青の

三角柱を、断層をはさんで位置するお寺の位牌堂と作業小屋に設置したプロジェクトです(図25)。二年前には一九五八年狩野川台風災害をアートにするという注目すべき展覧会「水のかたりべ」を、国土交通省沼津河川国道事務所と連携しながら開催しました。今年

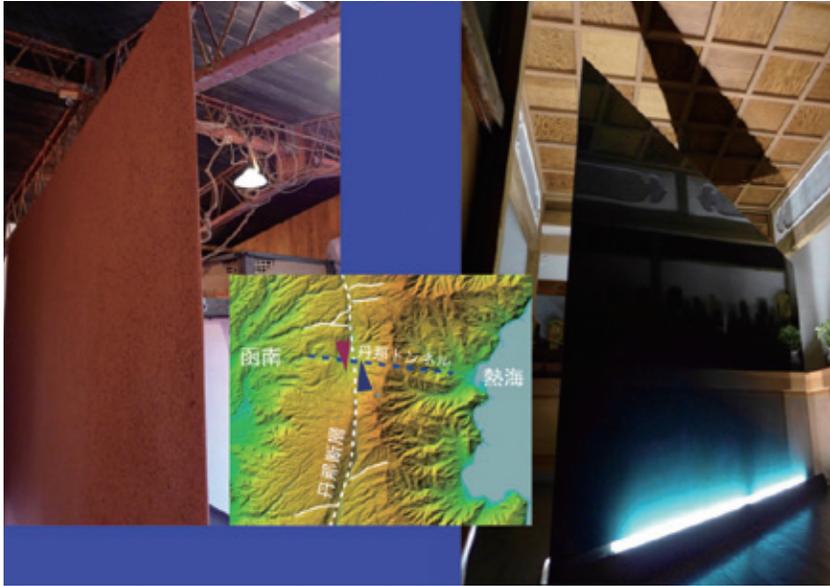


図25 クリフエッジプロジェクト「半島の傷跡」地形図の背景図：スーパー地形

度は「躍動する山河」と題し、中伊豆の大地をテーマにして、そこに生きた縄文人たちがどのような災害に遭って、それとどう向き合ったかをテーマとした展示とトークイベントなどを行う計画があります。

二年前に「しずおかHEAR」防災プロジェクトの一環として、防災アートが取り上げられました。伊豆半島は災害が多い場所なので、いずれはまた災害が起きるでしょう。そのときにアートがどのような力を持つのかをテーマとして、気仙沼市の美術館などと連携しながら幾つかのイベント「未被災地のための防災アートは可能か？」を実施しました。丹那断層を見学した後、三島で座談会も開きました。大井川の洪水や焼津の津波をテーマとしたイベントも開催されました。それらの記録はYouTubeの動画でも見られるようになっているので、検索してみてください。



地域の力
アート×
静岡での試み
の力

白井 嘉尚

静岡大学名誉教授／絵画、現代美術

はじめに

近年日本各地で、場の記憶や特色に着目した様々な「芸術祭」が開催され、人々の注目を集めています。その地域の住民にとつてはかけがえのない、しかし身近すぎて価値に気づきにくい「資源」にアートの光をあてることで、ツーリズムの新たな波を呼び起こした事例も少なくありません。

いずれにしても来場者は、交通の動脈から外れ、あるいは産業の衰退によつて時が止まったかのような場所に労を惜しまず足を運びます。そして、その旅の過程や、場と作品との関係をまるごと体験するところに際だった特徴があるといえるでしょう。

ここでは、そのような身近な地域や暮らしを新たな視線で見つめなおすアートプロジェクトについて、私が関わる地域連携による「めぐりりアート静岡」と、静岡県東部・伊豆での実践、そして県中部・西部で展開されている様々な取り組みを紹介させていただきます。

I めぐるりアート静岡

「めぐりりアート静岡」は、二〇一三年度に文化庁助成による静岡大学アートマネジメント人材育成事業の実習として始まりました。モデルは、「地域の過去と現在、場と人を結ぶ」という目的を掲げ、静岡県立美術館の川谷承子学芸員が中心となつて実施した「むすびじゅつ」（二〇一二年度）です。「めぐりりアート静岡」は、組織横断型のキュレーションチームが企画を担い、地域の大学、美術館、行政等が連携しリアル（年一回）形式で開催されてきました。

作家の選定にあつては、静岡にゆかりのある若い世代の作家に着目するとともに、仮に静岡にゆかりがない作家であつても、「地域との関わり」をテーマとする作家に参加を要請しました。美術展ではありませんが、既存の「美術」の枠にとらわれることなく、異なるジャンルの表現が多様に交錯するアクチュアルな場であることを目指しました。

なお、この講座では、限られた時間のなかで「めぐりりアート静岡」の特色を紹介するために、「インスタレーション」、「美術史との距離」、「写真・映像によつて、



図1 《トポス ～記憶の風景～》御宿 至, 2019(写真:遠藤幸廣)

「国際交流」、「ワークショップ」、「パフォーマンスアート」 という六つの切り口を用意しました。

(1) インスタレーション

「インスタレーション」という美術用語は、わが国では一九七〇年代ないし八〇年代から使われるようになってきました。それは、限りなく自由な表現形式で、いわば、その場限りのもの。したがって、「場」との深い関わりによって成立します。また、従来の美術ジャンルの枠にとらわれず、音楽や映像などとシームレスに繋がるのが可能です。

さて、ここではインスタレーションの典型的な作品として、「めぐるりアート静岡 二〇一九」に参加いただいた、富士宮市在住の彫刻家・御宿至氏の《トポス～記憶の風景～》(図1)を取りあげたいと思います。

御宿氏は、富士宮市に生まれ、小学校から高校までを静岡市で過ごし、その後、イタリア国立ローマ美術アカデミーで彫刻を学びました。二〇〇五年にはローマ大学付属現代美術実験美術館、二〇〇六年にはスポレート現代美術館の企画によって個展が開催されています。氏は独自の抽象彫刻でも高い評価を受けていますが、生活の

中のありふれた事物に着目し、それらの驚くべき組み合わせによって、私たちの感性と思考を刺激する精神的な場の創出を試みています。

さて、この《トボス〜記憶の風景〜》ですが、ここで使われている事物は、すべて、建設会社の資材置き場にあつたもの。H形鋼や覆工板や消波ブロックなどが実用から解放されて圧倒的な存在感を放っています。

作品名に「記憶の風景」とありますが、この東静岡の市有地は旧国鉄貨物駅の跡地です。御宿氏は、この東静岡が貨物駅だった時代に、その上に架かる長沼陸橋から目にした、さまざまな荷物を積んだ貨車がたまっていった時の記憶を起点に制作したとのこと。いずれにしても、東西の文明あるいはローマあるいは静岡の記憶と現在、また自らの記憶と現在の往還によって、普遍的な精神性を見いだそうとするスケールの大きなインスタレーション、新たな「記憶の風景」が東静岡のヒロバに出現しました。

(2) 美術史との距離

「めぐりりアート静岡」は、ジャンル横断型のアートプロジェクトですが、そのベースは美術展です。ですが

ら、そこに展示される作品は、何らかの意味で美術史との関係におかれることとなります。ただその「美術史との関係」は単純ではありません。そもそも、近現代美術には、「美術」を根源的に捉えなおそうという考え方があるからです。

「めぐりりアート静岡」では、伝統的な技法や規範を受け継いで、その上で、独自の追求をしている作家にも参加いただき、またそれらの規範を解体して新たな表現を立ち上げる作家にも参加いただいています。そのいずれにもさまざまな展開が見られますが、ここでは、静岡県立美術館ロダン館での対照的な二つの事例を取りあげたいと思います。

まずは、伝統的な技法や規範をベースに独自の追求をしている作家として、二〇一七年の、浜松市在住の若手彫刻家、池島康輔氏の作品を見てみましょう(図2)。中央の黒い作品はロダン作品。《カレーの市民》の中の一体でブロンズ作品です。その左側が池島氏の作品《ダーマ》で木彫です。

氏は、彫刻家として西洋近代の系譜を深く学び、また西洋美術という点では後期ゴシック彫刻を研究、さらに日本の仏像や遠州地方の屋台彫刻からも技や心を吸収しようとしています。そして、それらを高度に融合して、

新たな彫刻を切り開こうとしています。

次に、第二回「めぐるりアート静岡」(二〇一五年二月開催)での、浜松市出身の作家、鈴木康広氏の《空気の人》(図3)を紹介させていただきます。

《空気の人》は、ビニールで作った人体のフィギュアにヘリウムガスが詰められ、風船のようにロダン館の空中に浮かんでいます。近代彫刻の巨匠・ロダンの作品



図2 《ダーマ》池島康輔, 2010(写真:遠藤幸廣)

は、わが国にあつては西洋美術の代名詞のような存在です。ダイナミックな動きをほらむ英雄的な人間像。その重厚なブロンズ作品の上に、透明で軽やかでユーモラスな作品を浮遊させました。およそ百年の時を超え、美術や彫刻についての真逆にも見える立場の違いを超えて、まれに見る斬新なコントラスト、そしてユニークな対話 が成立したように思います。

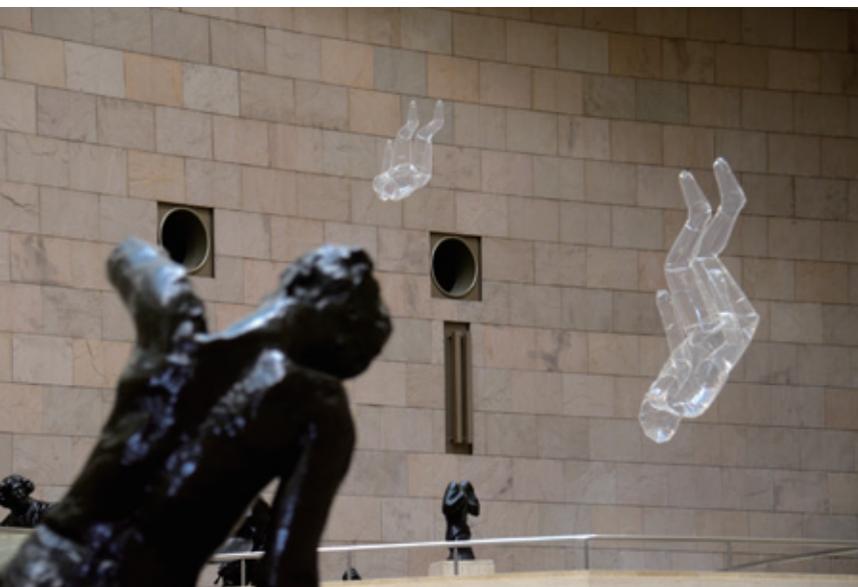


図3 《空気の人》鈴木康広, 2015(写真:遠藤幸廣)

(3) 写真・映像によって

「めぐるりアート静岡」では、写真や映像作品もしばしば登場しました。それは、私たちの時代のアクチュアルな表現手段だからです。ここでは、その中から、「めぐるりアート静岡 二〇一九」に参加いただいた多々良栄里氏を取りあげたいと思います。同氏は静岡市生まれです。お祖父さんが写真館を営んでいたので、幼時から写真は身近だったそうです。白梅学園短期大学では日本文学を専攻。卒業後は静岡に戻り、出版社でライターとして働いたとのこと。そんななか、しだいに写真に関心が移り、カメラマンに師事して一三年間にわたって発表のあてもなく、日々目にするモノを、ひたすら撮り続けたようです。藤枝駅南の実家の周り、自身で中古カメラ店を開業していた静岡市内の駒形通りなど。そこで出会った人々と、そのさりげない日常が写されました。ただ、それらのネガフィルムはその後、自室の片隅にしまい込まれたままでした。二〇一一年の東日本大震災では、そんな当たり前の日常が失われ、そのことで、かつて無心で撮り続けた「日常」こそ、かけがえのない大切なものだったことに気付いたようです。



図4 《吹く風も》多々良栄里, 2019(写真:加藤和夫)



図5 《アナログインデックス》ノエル・エル・ファロル, 2018 (写真:加藤和夫)

展示会場は、代表作『銀の匙』で知られる文学者、中勘助の文学記念館です。『銀の匙』には、中勘助自身の幼年期から少年期にかけての、明治時代の日々の暮らしが、みごとに綴られています。多々良氏の写真(図4)も、その市井の人々に向けての眼差しが、『銀の匙』と深く通底しているように感じました。コロナ禍の今、再び目にしたい作品です。

(4) 国際交流

「めぐりりアート静岡」は、国際交流の舞台でもあります。これまで、フィリピンの作家二名、韓国の作家一名を招聘しました。それら作家に直に出会い交流することで、垂言語的な力をはらむアートの豊かな可能性と、教科書やメディアを通じた情報では知ることの出来ない互いの歴史や文化に対する興味、またリスペクトを感じることが出来ます。

ここでは、「めぐりりアート静岡 二〇一八」における中勘助文学記念館でのフィリピンの作家、ノエル・エル・ファロル氏の作品を紹介させていただきます。ファロル氏は、一九八八年から一九九〇年まで静岡大学大学院への留学体験があります。帰国後はフィリピン大学などで美術分野を担当するとともに大学院で考古学を学ぶなど幅広い知的関心をお持ちの美術家です。参加依頼にあたって、まずは中勘助の代

表作『銀の匙』の英訳本を送ることで、場の特色をつかんでいただくことにしました。寄せられた作品は、本をテーマにしたもの、日記をテーマにしたもの、そしてファロル氏自身の幼年期の記憶をテーマにしたものの三系統で、みごとに私たちの期待に答えてくれました。

たとえば、厚いガラスを積層しブロック状にしたガラスを削って紡錘形にしたオブジェ(図5)。そのオブジェの形は、フィリピンのお米の形からとられているのとです。またガラスの中には虫のイメージが埋め込まれています。それは少年時代にお祖父さんの農場で、水たまりに落ちて溺れている虫を見た記憶と、木の樹液の中に閉じこめられている虫を見た記憶を表しているとのことです。そのようにファロル氏の作品は、自身の記憶にある光景や体験、そして作家として訪れた様々な国での経験や記憶が多様な手法で繰り広げられていました。

(5) ワークショップ

次は、ワークショップという切り口で、「めぐりりアート静岡」を紹介したいと思います。美術分野のワークショップも多種多様ですが、その特徴は概ね次のようにいえるでしょう。

・答えはない
・誰でも参加できる

たとえば、「めぐりりアート静岡 二〇一九」での、陶芸家きむらとしろうじんじん氏による「野点」(図6)。同氏は、ドラアグクイーンの装いで、リヤカーに陶芸窯を乗せて、日本中で楽焼のワークショップを行うアーティストです。じんじん氏が用意した素焼きの茶碗に参加者が絵付けをし、氏によつて焼成され、その場でお抹茶をいただくという野点会にもなっています。

それにあたっては、場所の選定がとりわけ重視され、二〇一九年はボランティアスタッフと共に、静岡市内で「お散歩会」を開催。二日間かけて場所を見て歩き、最終的に、静岡駅北側の紺屋町商店街にひっそりと鎮まる小梳神社境内での開催になりました。二〇二〇年はコロナ禍の影響で開催が危ぶまれましたが、感染リスクを極力おさえるような形で、東静岡アート&スポーツ/ヒロバで実施することができました。

続いて、第二回「めぐりりアート静岡」(二〇一五年二月開催)での、乾久子氏による「くじびぎドロイング」(図7)を紹介したいと思います。

それは、なんらかの言葉が書かれている「くじ」が用意されていて、参加者はそのくじを引き、そこに記され



図6 《野点》きむらとしろうじんじん, 2019(写真:望月一弘)



図7 《くじびきドロイング》乾 久子, 2015(写真:加藤和夫)

ている言葉を「お題」として絵を描かなければならないというものです。そしてその絵を描いた人は、別の紙に思い思いの言葉を記して新しくじをつくらなければなりません。だから、だれでも参加でき、無限連鎖的に続けることができます。

「お題」の言葉はたとえば、「いじわるなひと」「とだ

なに板前さんおいとくね」「あなたの秘密をひとつ絵にしてください」など。難しいお題であっても、それを引いてしまつたら、絵に描かなければなりません。子どもも大人も、誰もが楽しむことができ、また、絵の上手い下手など全く関係なく、参加者の遊び心や、想像力を解きはなつ優れたワークショップといえましょう。

(6) パフォーミング・アート

「めぐりりアート静岡」ではパフォーミング・アートも積極的に取り上げています。それは、眼だけではなく言葉や音や身体など感覚が複合的に沸きたつ場を創造するためです。

ここでは、ダンサーであり振付家のアオキ裕キ氏率いる、路上生活者／経験者によるダンスグループ、「新人Hソケリッサ!」の公演を取りあげたいと思います。リーダーのアオキ氏は、元ジャニーズ系ステージのバックダンサーという経歴の持ち主です。二〇〇一年、ニューヨーク滞在中に、九・一一のテロ事件に遭遇し、ダンスとは何かを問いなおすようになったとのこと。

「日々生きることに向き合わざるを得ないからだ」を求め、二〇〇五年から路上生活者や路上生活経験者によるダンス、「新人Hソケリッサ!」を開始しました。

「めぐりりアート静岡 二〇二〇」では、そのダンス作品《日々荒野》(図8)を、一〇月三十一日と十一月一日の二日間にわたって三公演実施しました。初日は、かがり火を焚いての夜の公演。二日目は、午前・午後各一回の公演が行われました。

アオキ氏以外のメンバーは、体型も身のこなしもダン

サーにはほど遠く、ショービジネスとは対極にあるダンスといえるでしょうが、アートとは、そもそも、人に見えるためのものである前に、祭儀でもあり、祈りや、やむにやまれぬ魂の叫びであったはずです。そんな根源的な問いをほらむ公演でした。



図8 《日々荒野》新人Hソケリッサ!, 2020(写真:石川綾子)

II 美術でめぐる東海道 in 静岡

静岡県内でも、各地でさまざまなアートプロジェクトが行われ、それぞれ特色を持っています。試みに、ここでは以下について触れてみたいと思います。

東部・伊豆

- (1) 田方郡函南町、伊豆市他での「クリフエッジプロジェクト」
- (2) 伊豆の国市大仁の「知半アートプロジェクト」
- (3) 沼津市の青木一香

静岡県内の広域的な芸術祭 東部・中部・西部

- (1) 富士本町、富士宮、富士川、蒲原の「富士の山ピエナーレ」
- (2) 島田市と川根本町にまたがる「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」
- (3) 掛川市の「かけがわ茶エンナーレ」

静岡県中部・西部の エリア集中型アートプロジェクト

- (1) 旧引佐郡の「天地耕作計画」
- (2) 島田市笹間の「ささま国際陶芸祭」
- (3) 掛川市大須賀の「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」

東部・伊豆

(1) クリフエッジプロジェクト

クリフエッジプロジェクトは、二〇一三年に三島市在住の美術家・住康平氏の呼びかけに応えた伊豆のクリエーターらによって結成されたアートプロジェクトです。「伊豆半島の特色ある地形・地質などの自然資源」と「自然災害の歴史、記憶のアップデート」をテーマとして様々な実践を重ねてきました。現在準備中の新たなプロジェクト、「躍動する山河」の企画書に、アートプロジェクトを通して「伊豆半島の自然環境を考え、暮らしや歴史を認識できるのではないか」との見通しが記されていますが、それだけ見ても通常のアートの枠にはおさ

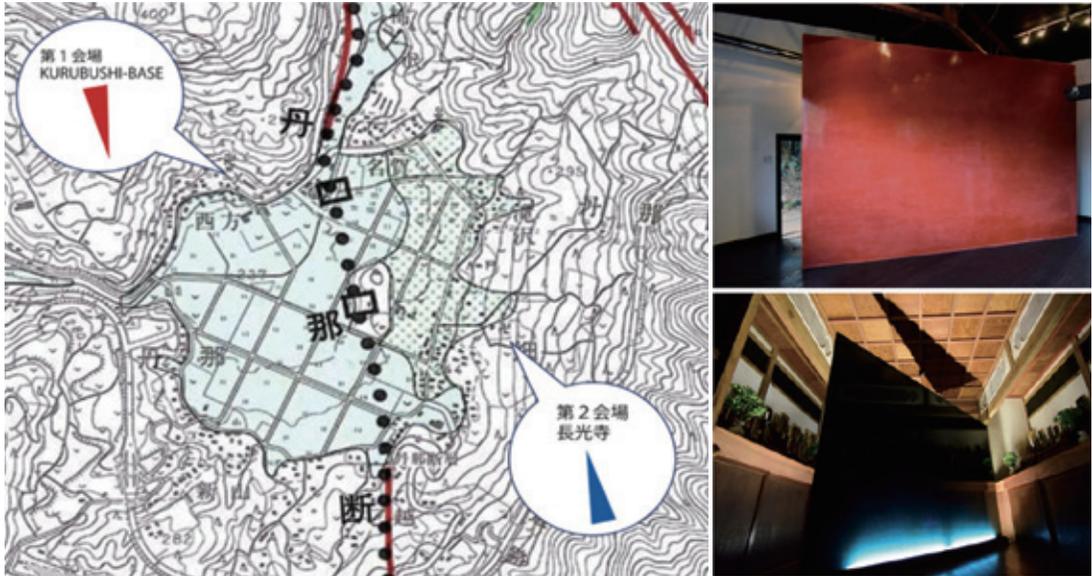


図9 「半島の傷跡」Cliff Edge Project, 2015(写真:内野り江子、図版:住康平、出典:国土地理院 地理院地図(電子国土Web) 活断層図)

まらない射程をもった取り組みといえましょう。

まず、二〇一五年に開催されたプロジェクト、「半島の傷跡」(図9)について。図版左側にあるのは、伊豆半島のつけ根に位置する丹那盆地の地図です。その真ん中、南北に点々と連なる線は「丹那断層」と名付けられた活断層を示しています。まさにこの展覧会は、その丹那断層と、それによって引き起こされた一九三〇年の北伊豆地震、そして、そこを東西に貫通させるべく掘り進められていた丹那トンネル工事との関わりをテーマとしています。

断層の西側にあるクルブシベースというギャラリーと断層の東側に位置する寺院、長光寺が会場で、それぞれに、方位磁針の先端からとられた形の造形が設置されました。そしてその「磁針」は、断層のずれた方向を指し示しています。西側の造形は、ベンガラ色をした漆喰が施された作品で、東側の造形は青い色をした漆が施された作品です。そして、漆喰の作品は、現代大津磨きという、高度な漆喰の技を使って断層側の面が鏡のように仕上げられました。漆の造形は、呂色仕上げという、これも高度な技法を使って断層側の面が鏡のように仕上げられています。

二つの造形を鏡面状に仕上げた理由は、一九三〇年に

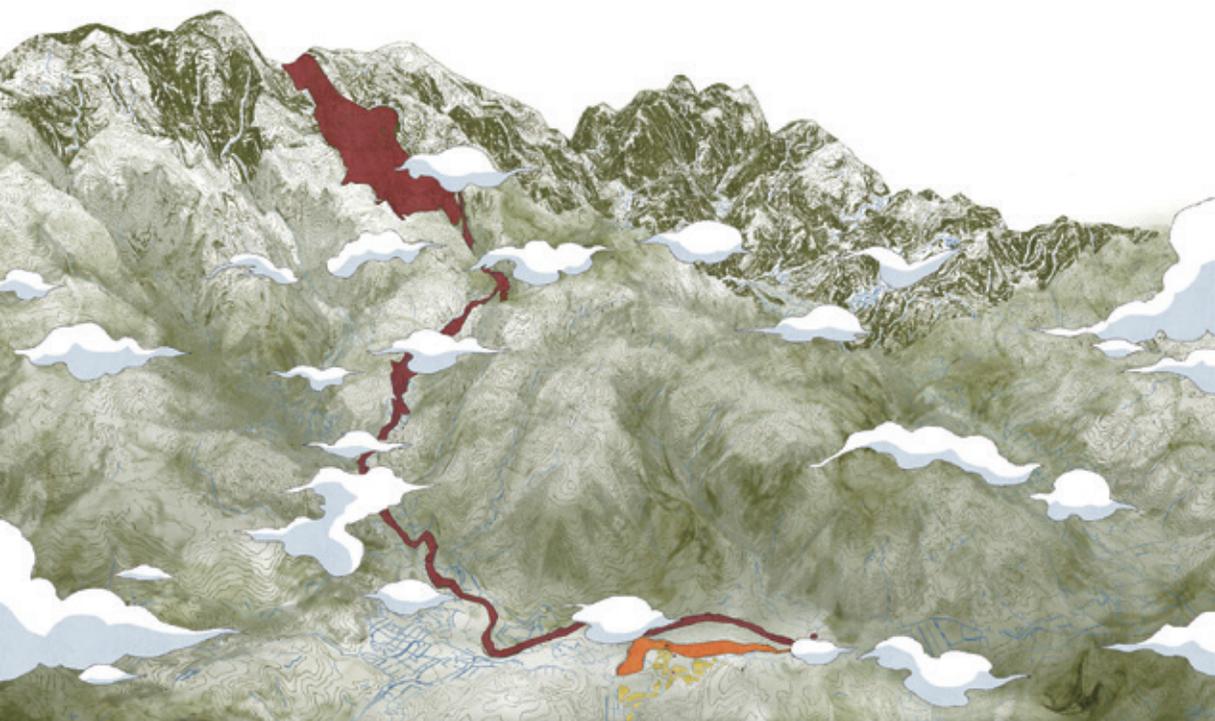


図10 《躍動する山河》伊藤允彦、中澤美和, 2021

発生した北伊豆地震に際して、工事中の丹那トンネルの水抜き用のトンネルが南北に二メートルほど横ずれし、そのずれた断層が鏡のようになった、非常に特殊な「断層鏡面」という現象が観察されたからとのことでした。「アートの」を、大地の成り立ちや自然災害といった問題と結び付けて考える、斬新かつ壮大な取り組みといえるでしょう。

続いて同プロジェクトの最新の計画を紹介させていただきます。それは二〇二一年の一月末から二月にかけて開催が予定されている「躍動する山河」展です。

「躍動する山河」とは伊豆半島全体を指すものと思われませんが、ここでは中伊豆の月ヶ瀬や、浄蓮の滝や、昭和の森の東側に位置する一帯が取りあげられるようです。具体的には、三三〇〇年前に噴火したカワゴ平。そして、狩野川台風の大雨で山体崩壊をおこした伊豆市いかたば筏場地区の蛇喰山じやばみやま。そしてその北側の上白岩地区にある、東日本では珍しい縄文時代後期の環状列石の遺構が残る上白岩遺跡です。

図10はそれらの位置関係を示した絵図ですが、赤く示されているのが、カワゴ平噴火による溶岩流が作りだした地形とそれに連なる大見川。一番上が噴火口、大見川の最初の屈曲の右手（西側）が蛇喰山、川を下りオレン

ジ色で示されたあたりが上白岩地区です。（この絵図は、地形学を専門とする研究者の伊藤允彦氏と日本画家の中澤美和氏の協働による絵画作品でもあります。）

そしてその上白岩地区には、このプロジェクトの三つの会場が集積しています。それは上白岩遺跡の他、鎌倉時代の棟札が残る大宮神社と、地域の歴史資料を収蔵する伊豆市資料館です。

大宮神社では、図10を描いた中澤氏が伊豆半島の特異な景観に触発されて制作した四曲一双屏風が展示される予定。伊豆市資料館では、中澤氏とともに絵図制作を担った伊藤氏と、現代美術家の清水玲氏、映像作家の磯村拓也氏による作品が発表されるとのことです。またそのテーマはカワゴ平噴火を遠因とする狩野川台風による土砂災害、蛇喰山の山体崩壊、狩野川氾濫との関係。また観光資源への影響や復興事業などとの関係が示されること。上白岩遺跡会場では、プロジェクトリーダーの住康平氏がメンバーの左官職人・鈴木政希氏と、大工であり木工作家・千賀基央氏とともに、環状列石と呼応するようなモニュメントを制作。また会期中には、大宮神社と上白岩遺跡で、舞踏家・松岡大氏の舞踏公演が予定されています。

(2) 知半アートプロジェクト

知半アートプロジェクトは、伊豆の国市大仁にある江戸時代の古民家「知半庵」を場として行うプロジェクトです。特定のアートジャンルに特化限定せず、二〇〇七年より年に一度のペースで力量のあるアーティストを招き、場の可能性を存分に引き出すサイトスペシフィックな企画を展開。菅沼家の菅沼謹吾（雅号・菅沼知半）の孫として「知半庵」で生まれたあわやのぶこ氏が、「知半庵」の心を、この家で生まれた者として受け継ぎ、現代に生かしていきたいと願い、文化交差をテーマとして開催しているものです。

同プロジェクトはジャンルにとられない自由さが特色ですが、ここでは、本講座の主題に沿って美術のセシル・アンドリュ『沈黙の鼓動』展（第六回 知半アートプロジェクト、二〇一四）（図11）と、六田知弘写真展『記憶のかけら』（第八回 知半アートプロジェクト、二〇一七）（図12）を取りあげたいと思います。

セシル・アンドリュは、フランスのアーティストで、「言葉」に深い関心を寄せています。知半庵では、屋内と屋外で二様のインスタレーションを展開しました。屋内展示では、連続的に連なる三つの座敷のそれ



図11 『沈黙の鼓動』セシル・アンドリュ、第6回 知半アートプロジェクト

Silent Pulse 2014, Cecile Andrieu photo by Tadasu Yamamoto, © Chihan Art. All Rights Reserved.

それ、真ん中の二畳分の畳が外され、そこに、柔らかな質感の事物がせりあがっています。それはシュレッターで細かく裁断された紙片を端正に集積したものです。一番手前の部屋の紙片は、あわや氏の曾祖父の遺言証書の複写をシュレッターにかけたもの。次の部屋には、この家が地域の文化拠点でもあった時代の句会や文人との交流の中で生まれた言葉がやはり複写されシュレッターで裁断され集積されたもの。一番奥の部屋は奥座敷で、この家のなかでも特別な部屋。お産に使われ、あわや氏自身が生まれた部屋でもあるとのこと。そしてその初宮参りの産着が複写され、それをシュレッターにかけたものが柔らかく重ねられています。紙に記された言葉・文字は細かく裁断されることで意味を失い、その余韻が消え残っているかのようです。それは「沈黙」と言ってもよいでしょう。そしてその「余韻」は確かに「鼓動」しているのかもしれませんが。

屋外展示は邸の裏手、栗の林を抜けた裏山の裾の小高い場所でした。そこに一对の石の祠が鎮座し家と敷地を守っています。その周囲には孟宗の竹藪があり、そこに立派な檜の木が何本もそびえています。アンドリュ氏はその木の幹に、ドーム型のボタンのような大きなオブジェを取り付けました。それは文章の最後に



図12 「記憶のかげら」六田知弘, 第8回 知半アートプロジェクト
Shards of Memory, 2017, a photographic installation at
Chihan Art Project. Image © Chihan Art Project and MUDA Tomohiro.

つける句点もしくはドット。すなわち、そのことで来場者はアンドリュウ氏がしつらえた豊かな「沈黙」の前にたたずむのではないでしょうか。そして檜の木は檜の木でありながら謎めき、来場者の想像力を喚起する徴しるしとなるのです。

次いで、六田知弘写真展『記憶のかけら』（図12）を紹介させていただきます。

二〇一一年三月一日に起きた東日本大震災。怖ろしい天災であり、また原発事故は人災でもありました。その被災地に残されたモノたち。写真家・六田知弘氏はその一つひとつを拾い上げ画用紙の上に置いてカメラに収めました。それら全ては誰かに使われていたモノたち。さまざまな記憶を宿すモノたちは、そのかつての日常の役割や面影を留めながらも、そこには怖ろしい震災の記憶が刻印されています。六田氏は、それを克明な写真として知半庵の室内に埋め込みました。

裏庭では日本やヨーロッパで撮られた、「石」の写真が屋外展示可能なボードに転写され、インスタレーションとして展示されました。

また、あわや氏が、この写真展に近くの小学生をクラスで招待したことにも感銘を受けました。津波によって渚に打ち上げられた事物を撮影した六田氏の写真は、実

物以上のリアリティを帯びています。子どもたちはそれをどのような思いで見入ったことでしょう。

(3) 青木一香

本講座は当初、沼津のプラサヴェルデで行われるはずのものでした。沼津といえば青木一香（洋子）氏の活動を素通りするわけにはいきません。

青木氏は東京藝大の油画科出身ですが、お父さんの影響で子ども頃より親しんだ書から多くのものを汲み取って、この時代の、全てがやり尽くされたかのような絵画の可能性を超えてゆきます。それは日本人また東アジアのアーティストにとって、いつか誰かが追及すべき大きなテーマだったのではないのでしょうか。加えて青木氏は、一九六〇年代の終わりから今日に至るまで、沼津や県東部で美術を志す若者にとって指導者であり、また先輩でありました。

沼津美術研究所を主宰（一九六八〜二〇〇九）。さらに、沼津において身近に現代アートに触れる場所としてE-SPACE（二〇一〇〜二〇一五）を開廊。そして近年は青木氏を慕う若手作家とともにEN（二〇一六〜二〇一七）、EN/DHARMA（二〇一八〜）といったアート

の場造りに取り組んでいます。

この写真(図13)は、二〇一〇年、沼津御用邸記念公園で開催された『青木洋子の屏風展』の様子です。この展覧会の見どころは、なにも旧御用邸という場の記憶や明治時代の木造建築との関係性だと思います。次いで、屏風という絵画形式の今日的な可能性でしょう。場との関係性という視点で最も鮮やかな印象を受けたのは、ここに掲載した部屋とは別の、御座所という部屋に広げられた二点の屏風でした。それは二曲一隻の《風影》と四曲一隻の《海の声》。淡墨と中墨のたつぷりとした筆触が不規則かつ優雅に乱舞する《風影》は松の枝を吹き抜ける風を想起させ、《海の声》もその筆触がざざ波、寄せる波、また光のきらめきや風のように、開放的な庭としてその背後の海原に向かって端然としつらえられています。百年前の面影を残す沼津御用邸記念公園の西附属邸と、和紙と墨による現代絵画としての屏風との出合いは、幾重にも時間が輻輳する興味深い試みでした。



図13 『青木洋子の屏風展』沼津御用邸記念公園, 2010 (写真:白井嘉尚)

静岡県内の広域的な芸術祭 東部・中部・西部

静岡県内で現在行われている広域的な地域芸術祭を三つ紹介したいと思います。

(1) 東部の「富士の山ビエンナーレ」

二〇一四年からビエンナーレ（隔年）形式で始まり、今年（二〇二〇）は富士本町、富士宮、富士川、蒲原をエリアとして開催されました。（※コロナ禍によって土日・祝日のみ）

(2) 中部の「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」

島田市と川根本町にまたがる大井川鐵道の無人駅を会場とし二〇一七年から毎年開催されています。

(3) 西部の「かけがわ茶エンナーレ」

二〇一七年に、掛川市を六つのエリアに分け開催されました。トリエンナーレ形式（三年に一度）ということで、第二回は二〇二〇年にあたっていました。コロナ禍によって二〇二二年に延期となりました。

(1) 富士の山ビエンナーレ

「富士の山ビエンナーレ」（主催：富士の山ビエン

ナーレ実行委員会）は、広いエリアに散在する古民家・商店・寺社仏閣・倉庫・空きビルや空き地など、何らかの特色ある場を会場としていますが、その場の選定が秀逸だと思います。私はその全ての会場に足を運んだわけではありませんが、それでもこのエリアには「隠れた名所」とも言うべき場所が多数あることを知りました。第一回を含めると由比、蒲原、富士川、富士本町、芝川、富士宮といった、まさに広域から磨けば光を放つ場を探し求め、所有者の理解を得、アートの場として準備を整えることは並大抵の労力ではないでしょう。関係者のそのような尽力が、地域の芸術祭を支えているのだと思います。

いずれにしても、多様な会場はそれ自体地域の記憶が刻まれたタイムカプセルであり、そこで展開される作品は全てその場との関係性において成立します。

たとえば、二〇一四年の第一回ビエンナーレでの由比エリアをサイトとした平川渚氏のケースを見てみましょう。作品《通過するもの》は、漁で使う網をテーマにすること、この町の暮らしと記憶を浮かび上がらせました。会場は、由比の旧東海道に面した民家です。桜エビ漁に関係している家の一室に、大きな不思議な「網」が吊り下げられています。それ以外その部屋には何も手を

加えられていません。網はこの町の漁師さんにとって無くてはならないものです。平川氏の「網」は何の役にもたたない網ですが、彼女がビエンナーレに向けてこの家に滞在し、漁師さんに教えてもらった網の編み方で昼夜を問わず一心に制作している姿を見て、何人もの漁師さんが手伝ってくれるようになったとのことでした。

来場者の視線は軽やかな「網」を「通過し」、それが設置された場に刻まれた分厚い時の流れを受けます。また同時に、その部屋はアート作品によって異化されて、奇妙な存在感を帯びて来場者を見つめ返しているように感じました。

(2) UNMANNED 無人駅の芸術祭

／大井川

「無人駅の芸術祭」（主催：NPO法人クロスメディアアしまだ）は、衰退した地域の象徴でもある無人駅と正面から向き合う、その目の付けどころが素晴らしい。このような機会がないと外から無人駅を訪れる人はほとんどないでしょう。しかし行ってみると、そこには、飾り気のない大井川流域の雄大な光景があり、地域の物語があり、地域とアートとのコラボレーション

ンがありました。

たとえば、二〇一九年に神尾駅で展開された中村昌司氏の《赤いささふね》。中村氏は、大井川鐵道沿線のまさに現在は無入駅になっている抜里駅近くの集落の出身です。氏はおよそ半世紀前、高校生の時に、大井川鐵道を使って通学していたとのこと。その頃は、通勤通学時間帯には電車も満員だったとのことでした。大雨が降ると、よく神尾駅前後で山が崩れ不通となり、その時には、線路を歩き迎えに来た電車に乗換えたことが多々あったそうです。

今では、旧駅舎は、入口の窓ガラスは割れ、中は資材が散乱し、壁は壊れ、荒れ果てていますが、ホームから遠く見える大井川は、往時と何も変わらない景観を示し続けています。

さて、神尾駅に近づくと来場者を出迎えるかのように大きな《赤いささふね》が、木と木の間に浮遊して（巧みに吊り下げられて）います。また、駅舎の周りや線路近くの山裾には、地域住民の協力によって作られたという、無数の小さな《赤いささふね》が地面から芽生えたように飾られています。それは彼岸花のようにも見えました。華やかでありながら、死者への手向けのようにもあり、祈りのようでもありました。

(3) かけがわ茶エンナーレ

「かけがわ茶エンナーレ」（主催：かけがわ茶エンナーレ実行委員会）は二〇一七年に、お茶と地域との深い繋がりを掲げ、市全域を六つのエリアに分けて展開しました。

ここでは、「めぐりアート静岡」にも二度ご参加いただいた彫刻家・木下琢朗氏の仕事を紹介させていただきます。氏は、「東山・日坂」と名付けられたエリアにあつて、標高五三〇メートルの山頂近くまで茶畑が広がる粟が岳で作品を展開しました。ちなみに粟が岳の茶畑は、世界農業遺産に指定された「茶草場」という農法がとられていることでも知られています。また山頂からの眺めは、大井川の扇状地と駿河湾、また伊豆半島と富士山、南アルプスが見渡せる大パノラマが広がっています。

その山頂近くの、普通なら部外者が足を踏み入れることのない植林された檜ばやしの中で、当時掛川市に在住していた木下氏が「森の再生」をテーマにした作品《刀耕火種》^{（とうこうかじゆ）}を発表しました。刀耕火種とは聞き慣れない言葉ですが、焼畑農法を意味するようです。そこに氏は自然と人との深いつながり、また生命のサイ

クルへの共感を込めています。その林に生えていた檜の木を間伐し、それを素材に、チェーンソーで種子の形を荒取りし、次いで丸太をそのまま燃料とする「木こりストーブ（スウェーデントーチ）」の手法で木の芯を燃やして成形します。それは「森の種」であり、「次のいのちを照らす象徴」として林間に「播種」^{（はしゆ）}されました。

静岡県中部・西部の エリア集中型アートプロジェクト

次に、静岡県中部と西部の、限定されたエリアで展開されている（いた）、三つのアートプロジェクトを取り上げたいと思います。

(1) かつて、引佐郡（現浜松市北区）細江町と引佐町で展開された「天地耕作計画」

(2) 島田市の山村、笹間で二年に一度開催されている「さざま国際陶芸祭」

(3) 旧小笠郡大須賀町、現掛川市大須賀地区で、一九九九年から毎年開催されている「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」

(1) 天地耕作計画

「天地耕作計画」は、細江町在住の村上誠氏・村上渡氏兄弟と、引佐町在住の山本裕司氏によるアートプロジェクトで、活動期間は一九八八年から二〇〇三年までの一五年間でした。「それぞれ生まれ育った山野」をフィールドとして、木や藁、石や土などを用い、造形表現の根源を探る活動が展開されました。オーストラリアのパス（一九九二）や、フィンランドのラハティーほか（一九九七）で大規模な実践を繰り広げたことも特筆されます。

一九八九年三月に公開された「耕作」には、「湖と山を巡る美術のフィールドワーク」という副題が付され、「湖」細江町の村上兄弟と「山」引佐町の山本氏、まさにそれぞれのホームグラウンドが現場でした。その時の案内状に使われた写真は、県境を越えて接する奥三河黒沢地区に伝承されてきた民俗芸能「黒沢田楽」の一場面です。

そのことで、美術を神事と農耕、すなわち民俗学や民族学との連関の中で再考するという姿勢が表明されていたように思います。

村上誠氏が「耕作だより 一四 最終号」（一九九五）

で記した「『見せる美術』という近代的な枠組みを一度白紙に戻したい」という言葉は、表現をめぐる、芸術家と観客を峻別するあり方への批判であるとともに、祖霊や地霊や死者といった、かつては大切にされていた場の記憶に向き合う構えともいえるでしょう。

(2) ささま国際陶芸祭

次に、「ささま国際陶芸祭」を紹介したいと思います。

島田市の山間部にある笹間は、大井川鐵道の笹間渡という駅から、山沿いの道を約一〇キロメートルほど入っていたところにあります。昔は小学校も中学校もありましたが、今は、すべて廃校になってしまいました。

地域住民の熱意によって、その小学校の校舎がリノベーションされ、宿泊もできる「山村都市交流センター」として生まれ変わりました。そこを拠点に、二〇一一年から二年に一度のビエンナーレ形式で始まったのが、「ささま国際陶芸祭」（主催…ささま国際陶芸祭実行委員会）です。アートディレクターは、瀬戸を拠点に世界各地で陶芸の個展やワークショップをくり広げている道川省三氏。氏の豊かな人脈で、世界中から、クリエイティブな活動を展開している陶芸作家が、この山間部の

小さな集落に集まること自体、驚くべきことではないでしょうか。

メイン会場の山村都市交流センターやいくつかの民家などでは招聘作家の作品展示が行われ、元小学校の校庭に立ちならぶたくさんのテントでは国内外の陶芸作家の展示即売があり、地場産品の飲食ブースも設けられています。旧体育館では作品の公開制作やワークショップが開かれるなど、作家間の交流、村の人との交流、陶芸ファンなど来場者との交流が繰り返し広がっています。たとえば第四回目にあたる二〇一七年は、人口四〇〇人ほどの集落に世界一七の国から、約七〇人が来村し、四日間で三二〇〇人の来場者が訪れたとのことでした。またその回までに参加した陶芸作家は、延べ二七カ国二九四名に上るなどの拡がりを見せています。

(3) 遠州横須賀街道ちっちゃな文化展

「遠州横須賀街道 街並みと美の晴れ舞台 ちっちゃな文化展」(主催：遠州横須賀倶楽部)は一九九九年に始まりました。毎年一〇月第四週の金土日に開催され、町は「文化展」一色に染まります。ジャンルの幅広さと、作家をキャリアで隔てないおおらかさが特徴といえま

しょう。藩御用達の廻船問屋であった清水邸、堂々とした木造旅館の八百甚、古風な構えの商店や民家にもかかわらずの賑わいが蘇ります。

特筆されるのは、一九八七年に商工会青年部を中心に結成された「横須賀倶楽部」で、地域資源の掘り起こしと住民の交流を促す様々な活動を推進してきました。時代の波から取り残された街並みそれ自体の価値や、東京の神田明神祭りの原型を今に伝える三熊野神社大祭に着目し、魅力の顕在化に務めたようです。そのような流れの中から「文化展」が誕生します。発案者は当時町役場に勤めていた深谷孝氏で、その目的について企画書に次のように記しました。

「街並みは私たちの先達の『時を越えての贈り物』なのである。その、街道や町家をいかに磨き、守り育てていくのが我々後代の役目ではないか。町家のハレの場はお正月、四月のお祭りとは年二回ある。一年二回のハレの場だけでなく数多くのハレの場に登場させ、町の衆や多くの人々にこの宝物を見ていただきたい。…略…芸術は、街道・町家を考える、宝を磨くための『手』である。」

その「手」は、現代アート、写真、クラフト、書、造形ワークショップや音楽など多種多様ですが、どこか一

本筋が通っているようにも感じられます。それは、この文化展を支える人々の「街を熟知した長い経験」と、先達からの「時を越えての贈り物」すなわちこの町屋・街並みの場の力なのかもしれません。

おわりに

四年前（二〇一七）に文化庁の助成事業として実施した静岡大学アートマネジメント人材育成事業の活動の一環で、「芸術創作の源泉としての三保の松原」を掲げ、三部構成のイベントを実施しました。ここではその中から、第一部のみ紹介させていただきます。それは、御穂神社の舞殿で、三保出身のSPAC（静岡県舞台芸術センター）の俳優、宮城嶋遙加氏による、能に魅せられたフランスの舞踊家エレヌ・ジュグラリスと、能楽『羽衣』との繋がりについての朗読劇上演です。その原作は、静岡市清水区（当時は清水市）在住で三保をこよなく愛する遠藤まゆみ氏による「碧眼の天女物語―もうひとつの羽衣伝説―」（発行者…西貝和子、一九八四）です。その本の挿画を担ったのは、やはり清水区にお住まいでグループ幻触の中心作家と

しても高く評価されている鈴木慶則氏でした。そのように能楽『羽衣』から現在にいたるまで、三保の松原をめぐるつて繰り広げられた魂のリレーを浮かびがらせる試みです。その場所に潜在する物語、そして地域にゆかりのあるアーティストを見出し出会いをもたらすことで、地域がさらに豊かになってゆくことを願いました。

ご清聴ありがとうございました。

なお、本ブックレットの発行にあたり、写真・図版の著作権者の皆さまより掲載へのご承諾と、温かい励ましのお言葉をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

静岡大学公開講座ブックレット

地域創造教育センターでは、二〇〇八年度より、『公開講座ブックレット』の刊行を開始しました。当センター主催の公開講座の記録を講演録という形でまとめて発行するというものです。公開講座を実施してそのまま終わりにするのではなく、記録として残し、公開していくことによつて、知の蓄積と共有を図ろう

と考えています。

これらのブックレットは、静岡大学附属図書館や静岡県内の公共図書館で閲覧することができます。また、静岡大学学術リポジトリ (<https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/>) でも公開しています。

1 身近な自然環境・里山との付き合い方

富田 昇「里山の性格とその変貌——史資料に見る山林利用の変遷」
小嶋睦雄「海岸林と人の共生関係論」
小南陽亮「里山の自然環境——生態学からみた里山の森林」

2009年3月刊
74ページ

2 浜松の戦争遺跡を探る

荒川章二「浜松の陸軍基地」
村瀬隆彦「浜松空襲について」
竹内康人「浜松の戦争遺跡」

2009年11月刊
76ページ

3 高齢化社会における地域とまちづくり

中條暁仁「高齢者は弱者なのか？」
矢野敬一「祭りを継続させる・町屋のまちづくりを立ち上げる」
南山浩二「家族・地域社会のゆくえと高齢者介護」

2010年3月刊
72ページ

4 いま、再び「いのち」を考える

松田 純「検証 生命操作の現在」
田島靖則「検証 いのちの「はかなさ」をめぐって」
石川憲彦「検証 現代人に突きつけられた生と死の課題」

2012年1月刊
62ページ

5 「いのち」と環境を考える

宗林留美「海のしくみと駿河湾深層水」
松田 純「遺伝子技術のゆくえと「いのち」の現在」
芳賀直哉「いのちの森を守る闘い——南方熊楠の思想」

2012年3月刊
74ページ

6 沼津の古代遺跡を考える

滝沢 誠「古墳出現期の沼津」
篠原和夫「農耕文化形成期の沼津」
菊池吉修「古墳時代後期の東駿河の様相——埋葬施設からみる特徴」

2012年3月刊
68ページ

7 食と健康を科学する

竹下温子「食の安全・安心を考える」
木崎暁子「食とバイオサイエンス」
日野真吾「食物繊維の効能——免疫とアレルギー」

2013年3月刊
92ページ

静岡大学公開講座ブックレット

8 災害を知り、防災を考える

鶴川元雄「火山噴火予知の方法——富士山の現状を考える」
原田賢治「静岡の津波防災を考える」
北村晃寿「大地が伝える津波と地震の記憶——静岡・伊豆の堆積物調査から」

2014年3月刊
96ページ

別編 世界文化遺産富士山を考える

小山真人「富士山 大自然への道案内」
増澤武弘「文化遺産を育て守る富士山の自然」
和田秀樹「富士山の美を作る生い立ち——生の姿と富士の恵」
小二田誠「眺める富士山——景観と表現」
湯之上隆「霊峰富士の宗教文化史」

2014年11月刊
114ページ

9 〈生きる〉を考える

松田 純「変貌する身体と生命」
丑丸敬史「老いを科学する」
久木田直江「医療と身体を考える」
竹之内裕文「〈死〉とともに生きる」
白井千晶「生むこと、生まれること」

2016年3月刊
128ページ

10 ふじのくにのホモ・サピエンス

山岡拓也「ホモ・サピエンスの技術と能力とは何か——世界各地で明らかにされている現代人的行動」
池谷信之「人類史最古の遠距離航海と土木工事——神津島産黒曜石と陥穴猟」
山岡拓也「三万五千年前のハイテク狩猟具——台形様石器の実験考古学」

2018年3月刊
70ページ

[講師紹介]

小山真人 (静岡大学未来社会デザイン機構教授／火山学、地震・火山防災)

1959年静岡県浜松市生まれ。静岡大学理学部地球科学科を卒業後、東京大学大学院理学系研究科などに学ぶ。東京大学理学博士(地質学)。現職以外に静岡大学防災総合センター副センター長、同大学地域創造学環教授なども兼ねる。富士山火山防災対策協議会委員、富士山ハザードマップ(改定版)検討委員会副委員長、伊豆東部火山群防災協議会委員。主な著書に『伊豆の大地の物語』静岡新聞社2010年、『富士山 大自然への道案内』岩波新書2013年。

白井嘉尚 (静岡大学名誉教授／絵画、現代美術)

1953年静岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。静岡大学名誉教授。美術家としては、『フリー・ジグソーパズル』『シャーベットのよう』シリーズ他で、「絵画」を多面的に追求。美術展企画者としては「地域」に着目し、『遍在する波動』(マニラ・メトロポリタン美術館／1994年)、『めぐりアート静岡』(2013年度～2020年度)等に参画する。文化庁助成による静岡大学「アートマネジメント人材育成事業」実施委員長(2013年度～2018年度)。

静岡大学公開講座ブックレット 11

静岡の自然と文化～東部・伊豆半島を中心に～

発行日／2021年3月29日

編集・発行／静岡大学地域創造教育センター

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

☎ 054-238-4817

印刷／株式会社 三創

